

第2回 真備地区復興計画策定委員会 議事概要

1. 会議名

第2回真備地区復興計画策定委員会

2. 開催日時

平成30年12月20日（木）13時30分～15時45分

3. 開催場所

真備保健福祉会館3階大会議室

4. 出席者

(1) 委員（17名）

奥田隆志委員，神崎均委員，横溝哲委員，黒瀬正典委員，山口敦志委員，坂本博委員，中尾研一委員，野田俊明委員，森本常男委員，平子ユリ子委員，松王資子委員，諏訪愿一委員，中山正明委員，妹尾洋子委員，佐藤通洋委員，三村聡委員，加藤孝明委員，

(2) その他

オブザーバー3名，事務局（26名）

5. 傍聴者

3名

6. 報道機関

13社

7. 議題

- (1) 第1回真備地区復興計画策定委員会での主なご意見について
- (2) 復興に向けた基本理念（案）などについて
- (3) 主要な施策（案）について
- (4) 今後の予定

8. 議事次第

- 1 開会
- 2 挨拶
- 3 議題

- (1) 第1回真備地区復興計画策定委員会での主なご意見について
- (2) 復興に向けた基本理念（案）などについて
- (3) 主要な施策（案）について
- (4) 今後の予定

4 閉会

9. 配布資料

次第, 出席者名簿, 配席表,
第1回真備地区復興計画策定委員会議事概要
資料1 真備地区復興計画策定検討資料

10. 議事概要 (◎ 委員長, ○ 委員, ■ 事務局)

➤ 第1回真備地区復興計画策定委員会での主なご意見について

- 抽象的なものはあるが、一つ、真備地区を全体的に面で見ても、ここは居住区、商業区、工業区などの方針を、30年、40年かけて、次の世代に向けて示してほしい。

最近はどんどん住宅が建ってきて、後から工場が入ってきて、近隣で騒音やゴミ問題などが発生している。これを機会に、すぐにはいかないが、地区を分けると住環境のよい地区になるのではないかと。そうすれば、一時、減った人口も戻ってくるのではないかと。

上からみた地区を分けて、守るべきは守っていくといった、将来はこのようになると提示できれば、次に住む世代からしても希望が持てると思う。トータルで見せてくれたら、ありがたい。

- ◎ 元に戻す、課題解決だけでなく、持続性のある未来。災害前よりも地域が発展に向かうということで、俯瞰して新たなゾーニングの視点も考えながら、未来志向も必要というご意見であったと思う。

➤ 復興に向けた基本理念（案）などについて、主要な施策（案）について

- ◎ 前回までの議論を踏まえた中で練り上げていった案というように理解しているが、具体的な意見、素直な意見を頂きたいと思う。

- 皆様からこれまでに頂いた意見を組み込んだ基本方針、それから主要な施策を掲げている。今後も検討が進んでいき、皆様からご意見を頂く中で取り入れたいものも出てくると思う。

まず『方針1 災害に強いまちづくり』だが、『1-① まちを守る治水対策』を迅速にしっかりと進めるとのこと。『1-② 身近な緊急避難場所の確保』では、復興懇談会や委員の皆様から頂いた意見の中で「各学区に浸水に対応できる避難所が無い」、川辺地区、箭田地区、呉妹地区では、「避難所は遠く、困っている」という

意見が多くあった。市の方針としても、『各学区に緊急避難場所を確保する』という施策を上げている。この緊急避難場所は、まず災害が起きた時とにかく近くの皆さんが一番よく知っている、逃げやすい場所ということで、学校などを検討している。今回の浸水状況では、体育館は浸水したが、学校の2～3階の教室や廊下は避難スペースとして使えるのでないかという意見を頂いている。そうしたことも踏まえながら各学区で緊急避難場所を確保していきたい。

そして『1-③ 地区ごとの防災体制づくり』。はじめに、『住民による地区防災計画の作成』と載せている。倉敷市全体での防災計画はあるが、その中で各自主防災組織、また地区ごとの防災計画が具体的な内容として出来ていない。是非、皆さんが真備に戻られる中で、一緒に計画を作っていきたい。もちろん市も支援する。各学区に避難場所ができるという前提で、どのように逃げるのか。住民の方々が計画をつくるのが大切だと思っている。そして2つ目は、地区防災計画で障がい者、子どもなど、早い避難が必要な方については避難準備情報が出たときに逃げて頂くが、相互共助の体制としての個人の防災計画、いわゆるマイタイムライン、自分の時間スケジュールで具体的に避難を考えていく体制が必要だと感じている。

『方針2 みんなで住み続けられるまちづくり』。被災者の方への支援、情報提供などを今後とも当然行いながら、新しいものが必要であれば導入する。それから『2-② 安定した住まいの確保』の中で、災害公営住宅の整備を検討すると申し上げていたが、ビジョンの中に『自力再建が困難な方のための災害公営住宅の整備』といった思いを書いている。さらに、『被災した市営住宅の再建』とある。当然、市営住宅に関しては再建したいと思っている。これは、必ずしも元の場所ということではなく、災害公営住宅との合築や場所等はこれから検討していく。

『方針3 産業の再興による活力あるまちづくり』は、真備の魅力を発信することによって、真備にもっと来てもらえる。

そして方針4, 5は、交流人口を増やしたり、持続可能なまちづくりなど。方針4, 5は、まだ具体的な施策を詰め込めていない。来年の3月に向けて計画として具体的なものを考えていきたいと思っている。

まずは、方針3までが急ぐ。

復興計画の目的は、皆様のご意見などを考えると、もっと未来に向けての発展の所の内容があるのではないか。実際の復興計画をつくるまでには、色んな施策も入れて、真備が発展して明るい元気なまちにしていきたい。

最初に補足させて頂いた。それでは議論、ご意見の方をお願いします。

- 『方針1-① まちを守る治水対策』。大武谷川が記載されていない。決壊はしていないが、同等の被害を受けている。住民は心配している。大武、妹山、この辺の地区が水没し被災している。この辺も強化の検討をお願いしたい。描かれていないと忘れがちになるので懸念される。

2点目、各学区の緊急避難場所。災害は待ってくれない。早急に決定してほしい。他のページでも出ていた避難訓練等は、避難場所が決定されないと差し障りとなる。いつ頃になるか決めてほしい。「検討中」という言葉は聞き飽きた。早急に具体的な回答を頂きたい。今回の災害において呉妹地区の人はお宮に避難した人が多かった。しかし、交通手段が途絶えてしまって、外から連絡できずに孤立した。地区と避難所をつなぐ道路整備、水没した時の対応も検討して頂きたい。

- ◎ 末政川・高馬川・真谷川だけでなく、大武谷川も忘れずということ。また各学区に避難所があるが、拠点となる避難場所の早期確保ということ。それが今後の計画や避難訓練などの活動についても影響する。具体的に、期限を入れた形での計画の盛り込み、最後はモビリティについての道路、移動の話だった。事務局の方から願います。
- もちろん、大武谷川についてもしっかりやっていきたい。
避難場所については、市として、学校等を基本に、決まり次第、来年の3月に限らず発表していく形で皆さんに周知していく。なるべく早くと思う。
- 治水対策について、小田川合流点の付替えの話はあったが、小田川の樹木の伐採のことが書かれていない。7月8日に矢形橋のところを通ったが、ものすごい量のビニール袋が木に絡まっていた。小田川の中の木は、直径40cm以上の木が多く生えている。それらも災害を早めた大きな要因であると思う。例えば10年に1回は伐採するというのも、一つの治水対策であると捉えてほしい。既に高梁川の所は農地として利用されなくなって、樹木が大きくなっている。5年ぐらい経って、直径10cm以上の木が多くある。災害を起こす原因にもなると思うので、検討をお願いしたい。
- ◎ 市だけでなく、河川管理全体での話に及ぶ。樹木の伐採のことは様々なところで話題になり議論されてきている。これについて、今の時点でコメントがあれば。
- 木の伐採について、小田川は全部切って頂いた。高梁川の木も、これまでの委員会、復興懇談会で多くの意見を頂いた。高梁川の樹木、河道の掘削等が行われることによって、5年後は小田川合流点付替え事業により大丈夫だが、それまでの5年間は現状の流れのままである。その5年間は、小田川の流れを高梁川へと流れ込みやすくなるように、国に一番にして頂くように強くお願いをしている。国が3年間で全国の防災対策を強化すると発表している中で、1番の中の1番になるつもりで切実にお願いしている。小田川の今後の維持管理、5年間は、小田川が高梁川に流れやすくなるための樹木の伐採や、土の浚渫をお願いし、国でも一生懸命検討して頂いている。必ず実施してくれると思っている。
- ◎ 最重要課題ということで要請して頂いているということでご理解いただければ。
- 国・県・市の連携は是非やってほしい。それに加えて、私たち市民としても何か参加できることはないだろうか。国の事業に声を出すことは中々できないが、学習をしながら、まちづくりとして何かお手伝いをしたい。できることはやりたい。それが、住民の防災意識を高めることに繋がると思う。

国の河川事務所の方にお話を聞かせて頂くことや、高梁川の現地を視察するといった取り組みを始めている。国の事業なので、具体的にどのようにしていくかは難しいと思うが、例えば小田川の一部にゴルフ場を造って、まちづくり協議会である程度の維持・管理をしていくというようなことはできるのではないか。あるいは砂利を取るといったようなこと。市民の力、あるいは行政だけでなく、他の力も入れてできないだろうかということも、あわせて考えている。検討をして頂けたらと思う。

- ◎ 非常に貴重なご提案だと思う。資料の中でも、全部に繋がっていく『方針5 支え合いと協働によるまちづくり』ということで書かれている。国・県・市がいろいろなハード、施策、制度、支援を整えていくが、やはり住民自らが主役となって、真備のまちを未来に向け良くしていく活動がなければ本当の復興は実現しない。具体的な施策にあわせて、住民の方々、自らが動いていけるように、市民参画が大切ということで、今の貴重な意見を受け止めさせて頂いた。事務局側から何かあるか。
- 川の利用、管理という面で。小田川の掘削は、全て堤防の中の土を取ることはない。国が作った川の流れの計画で、土の部分が残る。そうした場所をどのように使うか。昔は川で流れてきた土などは田んぼなどに使うなどされていた。土砂等の活用もあると思う。『方針4 真備の魅力を未来につなぐまちづくり』で、小田川の樹木伐採、掘削を行った後に、地域の資源として大切に、大切な資源を交流人口の拡大に使えないかなど、色々な可能性を考えていきたいと思っているところである。
- ◎ 引き続き、市民の方々のご意見、アイデアを出して頂いて、盛り上がっていくような流れがつかっていかればと思う。今の話について関連する御意見如何でしょうか。
- 河川事業に市民が参加できるようにという話だったが、その通りだと思う。災害の認識を高めていくということで、ある地域の話しであるが、その地域は親水と浸水という駄洒落で取り組んでいる。恵みと脅威の両方で、水に親しむ暮らしをしている人ほど浸水リスクに対する意識も高い。日頃から積極的に市民が河川と関わることで浸水に対して意識の高い地域社会ができていく。非常に良いご意見だと感じた。
- ◎ 今の意見は非常に示唆に富んだ話だったように思う。自然と向き合いながら、人の力で自然に勝つのは難しい。ともに暮らしていくという一体意識の中から防災意識も醸成し、具体的なアクションに繋がっていくという貴重な話であったと思う。
- 自営をされている経営者の方々をたくさん知っているが、再建できている人とそうでない人がいる。地元の企業の再建なくして、地域の再建はないということで、いち早く再建できるように、地域の人が集まるということで復興商店街ということを考えている。みなし仮設で皆さん地元を離れている。商店が集まると人が集まる。そこに、コミュニティの集まる場がないということでコミュニティの場所をつくって頂きたい。みんなバラバラでどこに住んでいるのか分からない。また戻ってくるかも分からない。そうした情報共有ができていない。地元の企業が再建できて、さらに人が集まれるような復興商店街を市と連携して進めているが、いち早くしてほしい。

そして、今後は、そこが真備の未来をつくる「まち」として恒久的な施設となるように、そして若い人が真備に住んでもらえるきっかけとしていきたい。そこで行政にもお願いをして、コミュニティの再建を早くしていきたいと思っている。

- ◎ コミュニティの大切さということは今回も書かれているが、バラバラに住んでいる方を孤立しないように繋いでいく、情報共有体制、拠点をつくりながら、新しいコミュニティを再生していく、そうしたステップが東日本の際にもとられてきた。人と人をつなぐ場所ということ、行政だけでなく、色々な団体で連携する。気持ちを繋いでいくことも大切である。
- 商工会で空き地を活用した復興商店街へ出店される方々を募っているが残念ながら、2、3軒というのが現状。もっと大勢の方へ知らせ、10軒、20軒、そこに行けば人に会える、物が買えるということを実現させていきたいと思っているので、市も支援をして頂いて、家賃等を考慮して頂くなど、お願いしたい。グループ補助金で緊急に集まってもらって、途中経過を含めて、復興商店街について、広く伝えていきたい。市も広報誌等でも広く伝えていってほしい。新しいまちをこの機につくるということの声掛けをしてほしい。期間も切羽詰っているようだが、時間も頂いて、これを機に何か新しいまちをつくり、若い人が残ってくれて時代が受け継がれていくように、商工会の立場として繋いでいきたい。
- ◎ 産業再生なくして、地域の持続的な発展はない。地域のほうでも、餅つき大会などイベント等開催されているので、何かお話があれば伺いたい。
- 菌地区では、11月25日にまちづくり協議会で、みんなで何かやろう、話し合いの場になればと思い、餅つき大会とうどんの提供をした。被災した人もそうでない人も大勢の方に集まって貰えた。このようなイベントをもう1回、菌で2月にやろうかなと。様子を見ると、久しぶりに会って意見交換などをされていて、本当に開催してよかったと思った。
- 今日も岡田地区では神戸大学と一緒に勉強会をしている。実際の避難行動はどうであったかということで、5回目の会議をした。

岡田地区が水害に遭うとは思っていなかった。避難情報等について、住民に浸透していなかった。住民がピンとこなかった。そのため、中々逃げなかった。避難所に行った人も、安心して家に帰った。その結果、水に浸かったという人が大勢いた。

避難所として、岡田地区は町内で一番大きな避難所になり、小学校に2,000名の方が避難してきた。避難所の運営の仕方について、運営の仕方が本当に良かったのか。最初、市の職員が4人来て、避難所を開設されて大勢の方がきた。市職員によるリーダー制が確立したのは、7月30日だったと思う。倉敷市の避難所の運用マニュアルがあるが、倉敷市は避難所の運営について検討や反省をしているのか。約120日間、運営がスムーズにいったのか。

まちづくりのボランティアとして避難所に入った。市の職員の方もおられたが、ピ

ースポート（ボランティア団体）の方々に全て相談して運営を行っていた。私達、まちづくり協議会にはあまり相談はなかった。そのあたりの避難所の運営について、私達にもう一度教えて頂きたい。120日間、この4ヶ月は、人のためにつくすことが自分のためという思いから活動を行ってきた。市が避難所の運営、これから各地区に避難所をつくると言われたが、本当に安全な避難場所ができるのか。検討して頂きたい。

- ◎ 避難所の運営は重要な課題。ピースボートの話もあったが、岡山大学も学生を真備のボランティアに出させていただく際には、ある程度の知見は持っているが、福島大学の方々に指導の協力を仰いだ。

いま委員が4ヶ月間という尊い経験をされている。この経験を活かしながら、どのような運営の仕方をしていくのか、構築していくのか、皆さんで議論していければと思う。市の職員も必死で、体調を崩されている職員の方々も多くいた。岡山県は、全国で一番、防災意識が低いというほど、安全・安心な場所だったということである。

今回の真備の経験を活かして、全国への横展開への礎として、本格的に検討していくことも復興計画では非常に重要と思う。市の方に質問があったのでお願いします。

- 避難所の運営、初めての経験も多く、混乱したことも事実。各地区のまちづくり協議会の方々にはご尽力を頂いた。被災がなかった地区にもとても支援して頂いた。とてもありがたく思う。今、どのように検討しているのかという質問だが、避難所の運営や対応、反省点などについて、職員に対しアンケートを実施し、防災の担当部局でまとめている。今後に繋げていきたいが、今回は受援体制が整わなかったというのが、大きなことであると思っている。

結果として、チームリーダーを固定した配置ができるまで期間がかかり、迷惑をかけた。全般的に反省しながら、受援体制、避難所の運営について、皆で作っていく体制を考えていかなければならないと思う。

- 河川の改修事業は決壊したところだけか。全体として取り組むのか。
- 国交省が元々の河川整備計画の見直し、計画をつくっているところである。市としては、国に対し、堤防の強化をお願いしている。国は河川整備計画に基づいて一定レベルの強化は実施しているが、市は出来る範囲で早急をお願いしている状況。全般的に見直しをしてもらっている。
- 国の管理はそのとおりと思うが、県管理の河川の末政川と高馬川も決壊している。これらについて、堤防の状況を共有したい。
- 末政川と高馬川についても、県の緊急治水対策事業で堤防の強化等を行うことになっている。
- 堤防の幅を広げるということは、市街地に張り出すイメージか。
- 必要な箇所の堤防の拡幅と高さが足りないところの嵩上げ。事業にかかる住民の所有地については、県が説明会をしている状況である。
- 『1-② 身近な緊急避難場所の確保』については、既設の学校を利用するといっ

たレベルの話なのか。今後、より大きな災害があったとき、今回より多い人数の避難があると想定される。最終的には、避難者はより安全なところへ避難することになると思うが、平地の学校などだけでは不安。例えば、高台のクリーンセンターや真備総合運動公園等に避難した人がいた。現在は、避難所に十分なキャパシティがない。恒久的なより安全と思われる高台への避難所建設が、復興計画では考えられているのか。服部地区は小さな地域で小学校がない。川を隔てて箭田小学校と呉妹小学校へ行かないといけない。このような状況の中で、服部地区の田んぼを埋立て、緊急避難場所を建設できないのか。こうした緊急避難場所の新設は計画の中に入っているのか、検討に入っていないのか。

- ◎ 第1回委員会の議論の中で、「東西だけではなく山側へ逃げるといった意識を醸成できればよい」、「各居住地の周辺で収容できる場所を整備する等、複数の避難場所・避難経路が選択できる将来のネットワークを考えていくことが必要。」とある。まずは、拠点の確保といった話になると思う。こうした点も皆さんのご意見を頂きながら、また実際、避難経路の多様性の確保も重要になってくる。平成31年3月末までにどうするかといった話は今後の議論になると思うが、現時点での事務局の案に対し、ご議論いただけたらと思う。

- まずは現状として各学区への確保を考えている。有力なものとしては、学校になると思う。

緊急避難場所は、長期に生活を送る避難所とは違い、緊急避難場所は災害が起きたときに身近に避難し、命を守るといった場所である。この緊急避難場所をまずは確保する必要があると考えている。

各避難場所まで車で逃げる人が非常に多く、また避難場所が3箇所しかなかったこともあり渋滞した。今後は、各学区へ分散して、逃げて頂けるような場所になればと思っている。津波もそうであるが、学校等だけでなく高台への避難が1つの重要なポイントになる。総合体育館は野球場の辺りが土砂災害警戒区域に指定されているが、正式に使えないのかといったことも検討していきたい。具体的な場所等については、まだ検討中である。まずは学校から検討していきたいと思っている。服部地区の皆さんの逃げる場所について、皆さんの避難行動の現状なども加味し検討していきたいが、現段階でどうするかは検討中だ。

- ◎ 私は今回7月豪雨で岡山市東区の平島団地に入らせて頂いたが、真備ほどではないが床上あたりまで浸水した。学校が低いので、多くの方が小高い場所にある神社に逃げられて一夜を過ごした。地域の人と声をかけあって、避難した。まずは、地域のことを熟知している地域の皆様方が、近隣で避難できる場所について議論して頂けるようなコミュニティ活動があればと思った。
- 川辺地区には住宅が約1700戸あり、ほぼ100%被災した。被害を受けてないのは1軒だけであった。川辺地区には高台・山がない。浸水した7日、ほとんどの人が、

道が浸水したため、避難場所である岡田小学校へ行くことができなかった。そのため、多くの人が避難場所ではない総社市や二万に避難した。岡田よりもそちらの方へ避難した人が多かった。川辺地区は、浸水するとどこへも行けない状況になる。

8日に避難所からパンをたくさん頂いたため、地域の避難している人に配ろうとした。浸水しているため2階へ避難した人など、7日から食事をしておられない方が多かった。パンを配ろうと川辺橋の所までは行けたが、人命救助以外は立ち入ることが出来ないと警察に言われ、まちの方へ入ることが出来なかった。船穂橋や二万橋などの方まで回らないと地区に入れなかった。食事が出来ずにいた方にパンを配ると、大変喜んで頂いた。この時点では、避難救助で地区に入っている人はほとんどいなかったが、避難救助以外は立ち入れないということで警察には止められた。縦割りであるせいか、9日も同じような状況だった。2階にしか避難できなかった人にパンを配れたことはよかったが、このような点で苦労があったことをお伝えしておきたい。

- ◎ 警察は二次被害の防止のこともある。激甚の災害への対応は今までの議論でもあったが、日常の情報ネットワークの大切さを考えさせられた。行政も含めて様々な連携が問われている。災害が起きた当日のこと、重さ、大きさなど客観的に判断しながら、教訓の1つとして活かしていけるまちづくりを考えていければと思う。
- 避難の件だが、今回の災害で多くのペットが亡くなった。お年寄りをはじめ多くの方がペットを飼っており、ペットは癒しであり日常の潤いである。被災後の台風の際も、ペットがいるので避難しない人が多かった。小さいことだが、今の時代、人生においてペットは重要。ペットを飼っている方の避難所の対応も考えてほしい。

8月から呉妹地区では「オール呉妹」でイベントをとということで、これまで3回開催した。呉妹地区では54%の人が被災したので、被災していない方の倉庫のものを提供してあげようということで、最初のイベントとしてチャリティのバザーを行った。その後、オールフェスタということで、地域のサークルがつくったうどんを振る舞った。ボランティアからの物資も届いた。その時、社会福祉協議会とまちづくり協議会と連携し、まちづくりさんの情報網を借りて、みなし仮設の方にも案内を送った。400人ぐらいの人が集まった。これまでは社会福祉協議会だけではみなし仮設の方への連絡ができずにクレームなどもあった。今回はまちづくり協議会と協働により大盛況となった。そうした情報提供が1回目の時からもっと早くできていれば、こうした大きなコミュニケーションの場を設けることができたと思う。みなし仮設に情報が流せたということで、呉妹地区にとって、とても大きなコミュニケーションの場がくれた。市やまちづくり推進協議会の方に感謝したい。

- ◎ ペットへの対応、地域の有志の方が預かってお世話をしていたと聞いている。つい最近まで開設されていたと聞いている。有名になったが、老舗のジャズ喫茶は、スピーカーが浸水し、皆がスピーカーを提供しカフェが再開したという話があった。理容店では、地域の皆さんで助け合って再開したという話もあった。

行政は最大限まで地域に寄り添い、一方、地域は協働で支えあうということ。方針の図にあるとおり、方針 1~4 を方針 5 が包み込む。未来の明るいバネにして市民の方が知恵を出し合って、自分たちで助け合う。住民主導の取組みで、自分たちのまちは自分たちで守るといった力強い意志を皆さんから伺えたように思う。地域が一体となって、行政が支えていくといった流れが加速していく復興計画にしていきたい。

- 先だって、コミュニティタクシーの再開にあたって会合があった。総合運動公園の建設型のみなし仮設に行った人に聞いたが、高齢の女性の方に聞いたのは、「交通手段がない。買い物等が不便で、ここから出ていくことができない」ということであった。会合で仮設住宅へのコミュニティタクシーの乗り入れを提案した。緊急的な課題。是非お願いしたい。

次に主要な施策の「2-③ 暮らしを支える公共施設等の復旧」。5つの学校（幼稚園、箭田小学校・中学校、陵南高校、支援学校）があるが、各学校の校長、教頭にいつ学校が使えるようになるのかを聞いたら何も分からないと言われた。情報が入っていない。学校に対して、いつ頃にどうなるのか情報提供してほしい。

- ◎ コミュニティタクシーは、私も東日本の際に、仮設住宅にお住まいの方、高齢の方へのモビリティの提供について携わった。この話は全体の復興計画の中で、あわせて足の確保ということが必要。2つ目の学校の話も合わせて市から願います。
- コミュニティタクシーの運営について、公共交通会議では、ニーズがあるところについては延伸するという方向性で協議・調整中である。それに当たって、どこからどこに行きたいというニーズを是非伝えてほしい。
- 定路線か予約（デマンド型）か。
- 定期と予約の両方で検討している。
- 学校については、現在文部科学省の災害査定を受けている。再開は、平成 31 年度中はかかると聞いている。災害査定状況を踏まえて、各学校の校長先生にも随時伝えて、質問をされたらわかるようにしておく。
- P6 の復興計画の策定の目的について、目的の範囲が狭い。被災された方だけが対象に見える。それに加えて未来の住民も視野にいれた将来に向けたまちづくりといった表現が良いのではないか。

P8 の理念の言葉は、都市計画マスタープランのテーマと同じにしているが、若干ニュアンスが違ってくる。「豊かな自然」というのは先ほども少し話したが、恵みと脅威の両方がある。自然の豊かな恵みをしっかり享受しつつ、一方でリスクと向かいあい賢く共生しあうというメッセージが込められている。「歴史」についても、今回の災害は、未来からみたらものすごい大きな歴史である。これまでの水害を経験してきた歴史といった事実だけでなく、災害を契機に社会が変わったということが歴史。今からの復興の営みが未来から見たときに歴史となる。まさに自分たちは歴史をつくっている、という意気込みがこの言葉に含まれている。行政としては、今使える復

興政策、支援策だけではなく、今回の被災の状況を踏まえて、地域の属性に合わせた新しい政策や改善された方法を発明してほしい。「文化」は災害文化。もともと水害が多い地域。災害文化の蓄積により、充実したより良い文化に。極端にいうと災害リスクが高い地域に住んでいる人ほど、高いレベルの文化を持っているというように自慢できるようになれば良い。

国土交通省では「水防災意識社会の再構築」を提言している。水害に対するリスクの意識を高めていく社会をつくっていくということ。以前の社会はそうした意識を持っていたが、いつの間にか忘れ去られていった。それをもう一度呼び起こして、未来型で再構築していく。国土交通省にもそれに向けて復興計画を支援してほしい。

【方針1】について、どこのまちも「災害に強いまちづくり」を進めている。どこの自治体の都市計画マスタープランも載っている。1回被災したことを活かせるように、被災した事実を踏まえた言葉にした方がよいのではないか。

施策に関しては前回会議で話した内容であるが、まずは①治水と避難。加えて②万が一浸水しても大丈夫な状態をつくる。③として今回、地区防災計画などのソフト対策、ハードもきちんとしていくことも必要。私の言葉になるが「浸水対応型の市街地」を構築。浸水したとしても、人の命を守るという形にしていく。例えば避難場所。逃げ遅れても、逃げれる場所、命を守る建物をできる限り増やしていく。公共施設ばかり、公と民で確保するといったこと。例としては、浸水深が深い場所では高い住宅を誘導することで命が守れる。ほんの少しの工夫で被害はだいぶ変わる。これからたくさん建物が建て替わっていく。こんな機会はない。この時に全ての建物が一工夫されていれば、万が一同じような災害が起きても被害が軽減される。河川堤防の拡幅（県事業）も一工夫できる。拡幅と周辺の市街地整備を一体的に計画として作っていくことも考えられるのではないか。色々なアイデアを考えてほしい。

【方針2】の生活支援・住宅再建について、今回真備のような被害はこれまで日本社会はあまり経験していない。現在ある国の支援制度は、地震や津波からの被災を前提としている。真備型の災害には対応しきれていない部分もある。真備型に制度等を改善してもらう努力も必要。市民と行政で国に提案していければ。

【方針3】の産業について、地元のお店が再開できない。再開してもお客が来ない。お客がみなし仮設などに移っている。復興計画の5年間の中で、どのような速度で住民が真備に戻ってくるのか。ある程度分かっていた方が、お店も事業計画を立てやすい。戻りが遅いと事業者は我慢できず再開しない可能性もある。ある程度こんなペースで戻ってきてもらえるのではないかといい、前提となるデータ等があれば、地元も店の事業計画を立てることに繋がる。施策の検討に繋がっていくのではないか。

- ◎ 最後の話については、我々大学も夏休みに水害にあった鬼怒川の事例（人口の推移、地価の推移等）について倉敷市から依頼があり研究をした。根本的に、真備は成功している自治体とは浸水の深さが全然違う。そのような話しも含め、他の事例などを参

考に、真備のオリジナルの復興というものになる議論を重ねていきたい。

- 真備に戻ることが復興への第一歩ではあると思うが、今被災している人たちが本当に悩んでいるのは家をどうしようか。真備に戻るか、他の地区に住むかは非常に大きな悩み。アンケートを取ったわけではないが、私の住んでいる自治会の中では、真備で生まれ育った人はほぼ100%戻ってくるという意見。しかし、新しく入居してきた20代～40代の世帯は分からないという。噂では20世帯の団地の中で既に転居された方が10世帯あるという話も聞いた。私の家の近くにも25世帯の、最近では2年前、古くは12～3数年前にできた団地があるが、再建に向かって修理している家は1戸のみ。さらに新築しようとして解体している家が1軒のみで、あとは放置。無人化している。それがどうなっていくのか、帰ってくる人も不安である。

一番は地域の安全ということが真備に戻る要素であると思うが、自然もあり、公害も少なく、暮らしやすく、地価も安かったのが、真備に移り住んでいた人も多いと思う。市はルールが厳しく、水害に遭わなかった高い土地で農転ができないが、特例で農転をかけられて自分の土地がもてるような施策を検討してほしい。区域分けをし、ここは居住区、商業区など示して頂くと真備に戻れる動機づけとなる。同じ場所だと不安がある。

末政川はまだ着工されていない。末政川の堤防が仮復旧のまま。復旧の姿がないので、来年への不安がある。そのため、家の再建も先延ばしで踏み切れない。着工の姿が見えれば現地で再建しようと思う。せつかく高台があるので、特例で農転を検討し、帰る動機付けにしてほしい。人口が増えると商業も発展し、コミュニティもよくなる。

- ◎ 今日皆様から忌憚のないご意見を頂いた。これに基づいて、復興ビジョンなどの策定をしていく。

➤ 今後の予定

- 復興ビジョン（案）について、本日の会議を踏まえて修正し、今月末にビジョンを公表する。内容は、三村委員長への一任をお願いしたい。

（異議なし）

➤ 閉会

- 以上で閉会する。ありがとうございました。